

安定感抜群の初V

4日間、オーバーパーなし

「この九州アマはでかい」

8アンダー 272

開陽高3年の有菌純（霧島）



最終日の1番では肝を冷やした。ドライバーでのティーショットが右にふけた。ボールはOBゾーンへと向かい、有菌は肩を落とした。暫定球を打ち、第1打の落下地点に走ると、そこに松の木に当たって落ちた白いボールがあった。「終わったと思いました。テンションが下がってたんですが、ラッキーでした。これはついているな、と」。このホールを何とかボギーに抑えた有菌には気持ち的に余裕が出る。ダブルボギー以上を覚悟したところが、スコアは1つしか増えなかったのだ。ただ、ヒヤリとしたのは、このホールだけだった。

3、6番でバーディーを奪って通算9アンダーにする。ハーフを終えた時点で2位に4打差。結果的には2位に3打差で優勝するのだが、全体的には安定したプレーが光った。初日から67・68・67・70と4日間で唯一人オーバーパーがない。

「ゴルフに対する考え方が変わった。コースマネジメントができるようになったと思います」。押す時は押し、引く時は引く。最終日も後半のインではボギーを叩かないように、とにかくパー狙い。ショートを除く7ホール中5ホールでティーショットでは3Iを使用し、ボギーを1個に抑え、あとはパーを並べた。有菌のゴルフで大きな転機となったのが、ティーチングプロとして有名な井上透プロらとの出会い。今ではひと月に1回、井上プロが教える横浜市まで足を運ぶ。「今年に入って本気でプロになろう」と有菌のハートに火をつけたのも井上プロかもしれない。

生まれは鹿児島県隼人町（現霧島市）。父・一樹さん（48歳）の影響で3歳のころには新聞紙を丸めたボールをお玉やおもちゃのプラスチックのクラブで打っていたという。ジュニアクラブを持ち始めたのは4歳ごろ。主なタイトルは、日当山中3年時の2020年に九州中学生ゴルフ春季大会に優勝。その年、初出場だった九州アマ（熊本空港CC）で4位に食い込み、それから4年連続で出場し、今回九州のトップに上り詰めた。



「九州アマ（のタイトル）はでかい。優勝カップは重かったけど、最高でした。1つの目標でしたからね。この後、九州ジュニアを取ったら、熱い」と口も滑らかになる。身長168cm、体重は昨年より10kg増え66.6kg。そのお陰でドライバーの飛距離も20ヤード伸びて、平均で285ヤードとなった。

「今年の最終目標はプロテスト合格だけど、日本アマではトップ10に入りたい。ドライバーの調子がもう一つだから、そのあたりを調整したい」。昨年の日本アマは42位タイ。1年前と比較すると、肉体も精神も技術も、ひと回りもふた回りも大きくなった有菌が、舞台となる北海道で大暴れする。

《ひと言》

◆3年連続2位・田崎春樹（大村湾）「3度目の正直といきたかったんですが、2度あることは3度あるになってしまった。最終日は一番いいゴルフができた。ただ、前半もう少し伸ばしていれば。でも、日本アマにつながるゴルフはできたと思う。有菌君はずっと安定していたし、気持ちに余裕があった。来年は何が何でも勝ちます」

◆3位・林田直也（ワカミヤ）「上位だけど、目標だった10アンダーも達成できなかった。チャンスはあったのに、バーディーパットを外して乗っていけなかった。期待に応えられず残念です。力を出し切れなかった」

